バンジョーとカズーイの大冒険 ～ライトノベルアドベンチャー～

作者アアアア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの大人気アクションゲームがハーメルンにやって来た！

グランチルダの野望を阻止するために、クマとトリが本の世界を駆ける！

バンカズ×ラノベ

よろしくお願いします

目次

冒険の始まり ―――― 1
アクセルの街1 ―――― 9

冒険の始まり

クルクル山のふもとにある一軒家、そこには二人の生物が住んでいた。
黄色のパンツに青のリュックのクマ、リュックの中には赤色のトリ。
かつては恐るべき魔女を何度も倒したという実績を持つ最強のふたりだったのだが、最近、冒険に出かけなかった結果、ブクブクと太ってしまった。
自宅でくつろぐ二人。
「はぁ～、最近暇ねぇ～、バンジョー」
「平和でいいじゃないか、カズーイ」
そう言って、バンジョーは手元にあるピザを掴み食る。
一方、カズーイはコントローラー両手にゲームに熱中していた。
「そういえば、どこぞの格ゲーではＤＬにジョーカーとかいうよく分からない仮面をした変質者が参戦したらしいわよ」
「へぇ～」
「そんなぽっと出の奴よりも、世界レベルのあたい達を呼べばいいのに」
「カズーイ、そんな事を言っちゃダメだよ」

こんなある意味危険な会話もしつつ平和を謳歌していた。
「……けて」
「何か言った？　バンジョー？」
「ううん」
「じゃあ、聞き間違いね」
突然、誰かの声が聞こえるが特に気にしない。
「……助けて」
「カズーイ、何か聞こえないかい？」
「空耳でしょ」
二人揃って無視をするからか声の主はしびれを切らして叫んだ。
「助け求めているんだから、早く来る！」
「うおわああ⁉」
「ギエー⁉」
驚きのあまり椅子から転げ落ちバンジョーははずみで、カズーイを下敷きにする。
「う、う～ん」
「何処の誰か知らないけど、呼ばれているみたいだし行くわよ！」
立ち上がったバンジョーにカズーイは頬を叩き歩かせた。

しかし、肥えた二人はよろよろと歩き、一歩一歩歩んでいくたびに、ズシンズシンと音を鳴らして歩んでいく。

全盛期の頃なら三十秒で着くであろう距離でも、三分かけて辿り着くと、一冊の本を拾う。

「これは……本かな？」

「今時、紙の本なんて珍しいわねー」

そう言って、バンジョーは表紙もタイトルも書かれていない真っ白な本を拾いページを捲った。その瞬間、本が光りだした。

「う、うわっ⁉」

「ちょっと！　早く閉じて！」

閉じるよりも早く、二人は本の中に吸い込まれていった。

「うわああああああああ」

「うわああああああああ」

宙から地面に向かって落ちていく二人。

「オォウ⁉」

地面に叩きつけられ悶える。

「うう……ここは本の中？」
「本棚多すぎない？」
　辺りを見渡すと真っ白な空間には大量の本棚が並んでいる。
「二人共……」
　その時、二人の頭上から銀髪のロングヘアに色白、白のドレスの女性が降りてきた。
「私はベラノと言います」
　ベラノは名乗ると深々とお辞儀をする。
「私は全てのライトノベルの創造をしています」
「放課後バトルフィールドとかも？」
「何だいそれ？」
「ふふっ良く知っていますね」
　疑問を浮かべるバンジョーに対してベラノは微笑む。
「私はここで全ての世界の管理をしていました」
　歩きながら説明を続ける。
「ですが、ある日グランチルダと名乗る魔女が現れ、他のライトノベルの世界に逃げ込んでしまったんです」
「え、オババが⁉」

「更に、私が追えないようにと何かしらの魔法で鍵を掛けたようです」
「あれ、ログさんの所で永久就職したんじゃあ……？」
　腕を組んで唸るバンジョー。
「就職？　確か、工場勤務は嫌じゃ、とか言っていたような……」
「とにかくオババが絡んでいるって聞いちゃ、黙っていられないわね」
「ベラノさん、分かりました。僕らでグランチルダを捕まえます」
「二人共……ありがとう」
　こうして戦う事を決めた二人だが、問題が二つある。
「とは言ったものの、この体じゃあねー」
「でしたら」
　ベラノは両手を広げると、左手にバンジョーとカズーイと書かれた本、右手にペンを出す。
「ちょっと待って下さいね」
　ベラノは手にしている本を開くと、ペンで文字を書き込む。
『ベラノの力によりバンジョーとカズーイは全盛期の頃の身体能力を取り戻す』
　その時、バンジョーとカズーイが宙に浮かび、ボンッと音と共に火花が散ると、ブクブクだった体が一気に痩せ、かつての冒険していた頃、６４時代の姿になった。

「おお！」
「ついでに協力してくれる人も欲しいわね」
「……仕方ありませんね」
　カズーイの厚かましさに呆れつつも、ベラノは再び文字を書き込む。
『バンジョーとカズーイの知り合いが何故か現れ二人のサポートをする』
　そう書くと、ベラノの傍に小さな土の山、モグラヅカが現れた。バンジョーとカズーイが近づき声を掛ける。
「ボトルズ、いるかい？」
「メガネ君、引きこもってないで出てきなさいよ！」
「二人共、そんなに大声を出さなくても聞こえていますよ」
　モグラヅカから妻子持ちのメガネモグラ、ボトルズが出てきた。
「はぁ……ここは一体何処ですか」
「ラノベの世界だよ」
「これからメガネ君も協力してもらうわよ」
「……分かりましたよ。所で二人はアクションを憶えていますか」
「勿論！」
「では、二人のアクションをほぼ全て使えるようにしましたよ。何か分からない事があ

りましたらモグラヅカを探して下さいね。では」
　そう言って、ボトルズは地面へと帰っていった。
「では、最後にこちら差し上げます」
　ベラノが指を鳴らすと、バンジョーの目の前に金色に輝くパズルピースが現れた。
「パズルピースでーす。沢山あつめて進んでねー」
　ピースの気の抜ける挨拶を聞き、バンジョーはピースを拾った。
「恐らくそれは……」
「このピースを絵にはめ込めばいいんですよね？」
「そうなのですか？」
「前にもやったからね。それで、その絵は何処にあるの？」
「すいませんそれは……」
　ベラノは俯く。
「僕らで探すしかないね」
「オババ、思いっ切り調子に乗ってるわね」
「さあ、行こうカズーイ。今回は少し違うかもしれないよ」
　バンジョーは思い切り走り出す。
「お二人共、よろしくお願いします……！」

ベラノはそれを見守っていた。

アクセルの街1

「さてと、それらしいものも見つかったわね」
二人が前に立つのは一枚の絵、足元にはピース型の土台。
しかし、絵は一ヶ所だけパズルピースの様に穴が空いていた。
「これにジグソーをはめればいいかな」
「そうだったんじゃない？」
「久々だから覚えていないなぁ」
そう言いつつもバンジョーは土台に乗って貰ったピースを掲げた。
すると手の中のピースが消えて、絵の穴が消えて一枚の絵が完成。それの下部にタイトルも浮かび上がる。
『アクセルの街』
それに答える様に隣にそびえる扉がきしむ音と共に開かれカズーイが呟く。
「アクセル？　変わった名前ね」
「とにかく行ってみよう」
こうして二人は扉の中へと消えていった。

二人は、パネルの上に光りながら現れると辺りを見渡す。
「ここが街？」
「きったない所ねー」
「とりあえず進んでみよう」
カズーイはリュックに入りバンジョーは、狭く暗い道を光の射す方へと走り出した。
路地裏を抜けた二人の目に飛び込んできたのは、石畳の地面に多種多様な種族が通りを往来している街中、まさにファンタジーの世界でバンジョーが感動の声を漏らす。
「ワーオ！　まるでファンタジーの世界みたいだね」
「アタイにはゲームの世界に思えるわ」
リュックから顔を出したカズーイがぼやくが、バンジョーは彼女と話す為に首を後ろに向けさせる。
「ゲームだったら人の話を聞くのが定石だけど……」
「でも、勝手に喋ってくれる訳じゃないのよ。何を話すか決めないと」
「そうだね。カズーイは何かあるのかい？」
「ここはファンタジーゲームの王道。ギルドの場所を聞いて冒険者になりましょう！」
「オッケー！」

会話を終えてカズーイがリュックの中に入った所でバンジョーが前を向くと、クマとリュックのトリが物珍しかったのか、人々が足を止めて見つめていた。だがバンジョーはそれを気にせずに近くの人に話しかける。

「すいません。ギルドってどこにあるんですか?」

「え? ああ! ギルドね! それだったら真っ直ぐ行って、突き当りを左よ」

「ありがとうございます」

バンジョーがお辞儀して感謝すると、カズーイが顔を出した。

「よし、ここからはアタイの番ね」

「おっ頼むよカズーイ」

カズーイの行動を察したバンジョーがノリノリで頼むと、リュックからカズーイの足が生えてきて、これまでと反対にカズーイがバンジョーを背負う体制になると、足早にギルドへ向かって行く。

「何なのかしら……」

道を聞かれた人はそれを呆然と見ていた。

こうして道順通りにギルドへ着いた二人はそのドアを開く。

「人がいっぱいいるね」

「酒場が併設されてるのかしら……酒臭い！」
　そこへウェイトレスの女性が声を掛けてきた。
「いらっしゃいませー。お仕事案内なら奥の席、お食事でしたら空いている席にどうぞー」
「あら、気が利いているのね」
「ボクらギルドに入りたいですけど……」
「でしたらこちらにどうぞー」
　内装を見ながら目的の場所に連れられて行く二人。
「あれは……クマ？」
「背中からトリが出てないか？」
　ざわざわとどよめく周囲を無視してバンジョーは、受付に立ち声を掛けた。
「すいませーん！」
「えっ⁉　クマ⁉」
「あたいもいるわよ！」
　受付嬢はカウンター越しに立つバンジョーに困惑しているとカズーイが顔を出した事で混乱してしまう。
「えっ？　えっ？　クマに背中にトリに……？」

「受付おばさんちょっといい？」
「カズーイ！」
対応している女性は若く綺麗な人だが、カズーイはずけずけと物言う。
「アタイ達、ギルドに入りたいんだけどいいかしら？」
「でしたら二人？　ですと登録手数料に二千エリス必要になりますが……」
「エリス？　お金の事かな？」
「アタイは持ってないわよ。おばさん、オンプじゃダメかしら？」
実は二人はここに来る道中で落ちているオンプも回収していたのだ。
今後、出る可能性が無いと思うのでここで紹介しよう。
「沢山集めると良い事のあるオンプでーす。扱い酷くありませんか？」
「髭の元配管工が一々コインを拾った事を書く？　所詮アンタはその程度の存在よ」
カズーイに一蹴されしょんぼりするオンプを他所にバンジョーも考える。
「うーん……お金が入ったらまた来ます」
そうして二人はお辞儀をしてその場を離れた。

腕を組みながら歩くバンジョーにカズーイが声を掛ける。
「どうするのよ。お金なんて簡単に用意できないわよ」

「何か簡単に稼げる方法は……」
バンジョーが辺りを見渡すと、四人席でトランプに興じる三人を見つけた。しかし、二人が興味を持ったのはテーブル上のエリス。二人は迷わずそこに行き、カズーイがいの一番に話しかけた。
「オッサン、そこで何してるの？」
「ポーカーだよ」
エリスに目を輝かせるカズーイに気づいたのか持ち主であろう男が睨みつける。
「……盗るんじゃないぞ」
「やーね。あたいがそんな事する訳ないじゃない」
「ボクらも参加したいんですがお金が無くて……」
「なーんだそうかそうか、おれがとくべつにかしてやるよ～」
顔が赤くなっている一人が楽し気に声を掛けてきて二人はその理由を相手の顔色で悟った。
「アンタちょっと飲み過ぎじゃない？」
「へーきへーき、平気だから」
カズーイがあまりの酒臭さに怪訝な顔をするが、男は平気な態度をしながら話す。
「それに俺は強い！　酔っていれば尚更な！」

「どーだかねぇ……」
「まあまあカズーイ。これで勝てたらボクらもギルドに入れるんだから頑張ろうよ」
「ん、そうね」
　そう言いながら二人は唯一、開いている席に座ってトランプを受け取る。
「ところで、二人？　はポーカーを知ってるか？」
「モチロン！　知り合いと一緒にした事だってあるわ！」
「だったら説明はいらないな」
「すいません。掛け金が無いけれど……」
「おおっと！　ほらよ」
　酔っ払いはポケットから千エリスを出すとそれを二分割して二人に渡した。
「五百エリスだ」
「たったこれだけ？」
「ギルドに入りたいんだったら、この試練を抜けないとなあ！」
　酔っ払いはそう言って高笑いをしだし残りの二人もバンジョーとカズーイを見つめる。
「久々だから上手くいくかなあ？」
「バンジョー、こういうのは心意気が大事なのよ。さ、始めるわよ」

こうしてバンジョーとカズーイも加わった五人のポーカーが始まった。